

修士論文（要旨）

2014年7月

中年後期女性における生き方に対する価値観形成のプロセス

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

212J6903

七條佳代

目次

I はじめに	1
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	2
3. 目的	2
II 研究方法	3
1. 調査対象者	3
2. 調査方法	4
3. 倫理的配慮	4
4. 分析方法	5
III 結果と考察	5
1. ストーリーライン	5
2. カテゴリーの詳細	8
1)【これが私】	8
2)【気づき】	12
3)【覚悟を持つ】	16
4)【価値ある考え】	17
3. カテゴリーの考察	28
1)【これが私】	28
2)【気づき】	29
3)【覚悟を持つ】	30
4)【価値ある考え】	30
IV まとめ	31
V 今後の課題	32

謝辞

引用文献

資料

- ・図 1 結果図
- ・分析ワークシート集
- ・調査票

I. はじめに

1. 問題の所在と背景

日本人は長く生きられるようになった。特に女性は長命である。柏木⁶⁾は、人生が長くなった今、人や世の中という「他者という枠」にとらわれず「自分の志というものを見直してそれを軸にして生きるということが必要な社会になってきている」と述べる。女性が高齢期を見据えて今後の生き方を考える重要性が理解される。

中原⁷⁾の 50 歳から 64 歳までを「向老期」と定義して行った質問紙調査からは向老期の考えは高齢期へと継続する可能性が示されていた。人はこれまでの経験から得た価値観をもとに生きていくと考える。中年後期にある女性たちの、経験から得た価値観の内容を明らかにし、形成の過程を検討することは、今後、女性たちの価値観形成にとって何らかの示唆が得られる可能性がある。しかしこれまでの研究では中年後期女性を対象とし、価値観を形成するプロセスを面接において尋ねた研究は見当たらない。

2. 目的

本研究の目的は中年後期女性における生き方に対する価値観形成のプロセスを解明することである。

II. 研究方法

1. 調査対象者

本研究では 50 歳から 64 歳までを「中年後期」と操作的に定義した。中年後期女性 14 名を対象者とした。抽出方法は機縁法で行った。

2. 調査方法

データ収集のため、面接調査を行った。面接に先立ち、文章完成法に基づいた調査票を用いた。調査票に沿って半構造化面接を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得た。

4. 分析方法

本研究では分析に Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)²⁹⁾ を用いた。分析テーマを「中年後期女性における生き方に対する価値観形成のプロセス」とし、分析焦点者を「地域に在住する、結婚および就業経験を持つ中年後期女性」とした。

III 結果と考察

分析の結果、【これが私】【気づき】【覚悟を持つ】【価値ある考え】という、4個のカテゴリーを生成した。各カテゴリーを用い、「中年後期女性における生き方に対する価値観形成のプロセス」を次のようにまとめた。

「中年後期女性は既に獲得された【これが私】という意識のもとに日々を生活している。それは人生で起こることを引き受ける【覚悟を持つ】自分でもある。そうした自分が日々【気づき】を得ながら、【価値ある考え】を自分のものとしている。【価値ある考え】をもとに生きるが、出来事のたびに【これが私】という自己に戻り、また【気づき】を得て価値観の修正や継続、新たな価値観の形成を行う。この営みは繰り返し行われ、中年後期女性の成長へとつながっていく。

IV まとめ

本研究は分析テーマを「中年後期女性における生き方に対する価値観形成のプロセス」とし、分析焦点者を「地域に在住する、結婚および就業経験を持つ中年後期女性」とした。M-GTAを用いて分析した結果、価値観に至るプロセスとして、【これが私】【気付き】【覚悟を持つ】【価値ある考え】のカテゴリを生成した。中でも【覚悟を持つ】【気付き】は価値観形成の要因として重要であると考えられる。女性の中年後期からの人生を考える時、これからも覚悟を持った自分が多くの気付きを得て、現在の価値観を検討していくことが望ましいのではないかと考える。

中年後期女性は『調整する』『わきまえる』『比較する』といった知恵を使い生活していることが分かった。また、中年後期女性の発達には『挑戦する』のように、既に経験知を持つ彼女らが主体的に何かに挑戦し、新たな経験を得ることで促されるのではないかと考察した。

V 今後の課題

本研究の対象者は14人であった。また、高学歴であり過去に専門的、技術的な職業に就いていた、あるいは今もそうした職業に就いている対象者が多く、限られた範囲の研究であった。中年後期女性の価値観形成のプロセスを明らかにするためには、岡本¹⁰⁾が示すように「主婦専業型、シングル型」なども含め、様々なライフスタイルを持つ中年後期女性を対象とすることが望まれた。人数も少数であるため、理論的飽和には至っていないと考えられる。

本研究の対象者は中年後期の女性であった。しかし、高齢期での夫婦のみの暮らしや一人暮らし、未婚率の上昇といった現在の日本の状況を見た時、若い世代や、男性の価値観を検討することも必要ではないかと考える。

引用文献

- 1) 武村由美「限界集落での“幸福な老い”―独居高齢女性のライフヒストリーより―」『高知工科大学紀要』、7(1)、2010.
- 2) 古谷野亘「サクセスフル・エイジング」『改訂・新社会老年学 シニアライフのゆくえ』古谷野亘 安藤孝敏 株式会社ワールドプランニング、2008.
- 3) 下仲順子「高齢社会と高齢者の心理学」『高齢者心理学』下仲順子 中里克治編著 建帛社 2004.
・進藤貴子「高齢期の人格、自己概念の特徴」同上
- 4) 黒川由紀子「高齢女性の心理的問題」『女性の発達臨床心理学』園田雅代 平木典子 下山晴彦 金剛出版、2007
- 5) 稲谷ふみ枝『高齢者理解の臨床心理学』ナカニシヤ出版、2003.
- 6) 柏木恵子「おとなが育つ条件」おとなが発達するとはどういうことなのか 社会教育 2013-11
- 7) 中原純 藤田綾子「向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係」『老年社会科学』29(1)、2007.
- 8) 岡本裕子『中年からのアイデンティティ発達の心理学―成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味』ナカニシヤ出版、1997.
- 9) 岡本裕子『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房、2002.
- 10) 杉村和美「現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達」『女性の生涯発達とアイデンティティ―個としての発達・かかわりの中での成熟』岡本祐子編著 北大路書房、1999.
・岡本裕子「女性の生涯発達とアイデンティティ―背景と問題のありか―」同上
- 11) 平岡真理「中高年期における将来の人生の出来事の予測と準備について―第2の人生や退職・定年後の生活について―」『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』6、2007.
- 12) 鈴木忠『生涯発達のダイナミクス』東京大学出版会、2008.
- 13) やまだようこ「「発達」と「発達段階」を問う：生涯発達とナラティブ論の視点から」『発達心理学研究』22(4)、2011.
- 14) 川口一美「中高年の老後に関する一考察―聞き取り調査を中心に」『聖徳大学生涯学習研究所紀要』10、2012.
- 15) 徳田直子 杉澤秀博「女性定年退職者の退職後の楽しみ・生きがい：現役時代の経験との関連について」『老年学雑誌』1、2010.
- 16) 田中真理 大川一郎「日本人高齢者におけるサクセスフル・エイジングの構造―半構造化面接を用いて―」『高齢者のケアと行動科学』15、2010.
- 17) 谷井康子「大都市に独居する超高齢女性の支えについて―事例を通して―」『日本赤十字広島看護大学紀要』1、2008.
- 18) 五ノ井仁美 下仲順子「高齢者におけるライフレビューと心理社会的発達の関連」『文京学院大学人間学部紀要』12、2010.
- 19) 難波淳子「中年期日本女性の自己の発達に関する一考察―語られたライフヒストリーの分析から―」『社会心理学研究』15(3)、2000.

- 20) 高井範子「高齢期の人々の生き方態度 人生受容・生活感情の諸相及び高齢者支援に向けて」『臨床心理学研究』46、2009.
- 21) 高井範子「ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討：青年期から高齢期を対象として」『太成学院大学紀要』13、2011.
- 22) 下仲順子 村瀬孝雄「SCTによる老人の自己概念の研究」『教育心理学研究』23(2)、1975.
- 23) 星野和実「老年期の心理社会的発達に関する研究－SCTによる検討－」『三重県立看護大学紀要』1、1997.
- 24) 柴田雄企「文章完成法からみた老年期の自己概念」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』47、2010.
- 25) 岡本祐子「中年期の自我同一性に関する研究」『教育心理学研究』33(4)、1985.
- 26) 日瀨淳子 岡本祐子「中年期の時間的展望と精神的健康の関連：40歳代、50歳代、60歳代の年代別による検討」『発達心理学研究』(19)2、2008.
- 27) 花井友美『『価値観』をめぐる諸研究－国家・民族・時代による価値観の違い－』『「エコ・フィロソフィ」研究』1、2007.
- 28) 木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析方法」『富山大学看護学会誌』6(2)、2007.
- 29) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007.
- 30) 岡本祐子「生涯発達からみた中年期の意味－アイデンティティの危機と成熟」『教育と医学』39(9)、1991.
- 31) 高山緑「知恵－認知過程と感情過程の統合－」心理学評論 52(3)、2009.
- 32) アルフォンス・デーケン『よく生き よく笑い よき死と出会う』新潮社、2003.
- 33) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、2004.
- 34) 守屋慶子「老年期への発達－経験知に根ざした人生の創出－」『高齢者のケアと行動科学』14(2)、2009.
- 35) 鑪幹八郎『アイデンティティの心理学』講談社現代新書、1990.
- 36) 深瀬裕子 岡本祐子「青年期から老年期に至るアイデンティティの変容－高齢者の語りの分析から－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』(60)、2011.